

第1講 講義資料

はじめに

いまから30年以上も前，私がまだウイウイしい大学生だったころ，京都大学に北井志内という名の数学の先生がいました。当時，京都大学では学生運動がさかんで，「バリケードのなかで講義を」などと勇ましいスローガンをふりかざして数学の講義を「実践」した数学者もいたようですが，北井先生も大学改革をもとめる学生たちの「大学闘争」には好意的な立場をとっていたとおもわれます。彼の本名は「笠原皓司」といって，その対話講義録が最近復刊されました（『対話・微分積分学』，現代数学社）。レベルはかなり高いのですが，たいへんおもしろく書かれた読み物風テキストブックです。私も北井（笠原）先生にあやかって対話形式を積極的に取り入れ，対話篇「経済史入門」を書くことにしました。それが講義資料です。

[1] 場面の設定：

「経済史入門」と題する新入生向けの基礎ゼミナール：参加者は2人だったが，後から経済史の勉強をもう一度やってみたいという留年生が参加を申し込んできた。さらに，もう一人，女子留学生も参加を願い出てきた。佐々教授の判断で，結局，4名でゼミをはじめることになった。

[2] 登場人物：

A 独立行政法人大学教員；佐々俊郎〔サッサトシロウと読む〕（たいへんせっかちな先生で講義も下手だが，講義にはたいへん熱心で無類のおしゃべり。ゼミナールも自分の独演会として運営することを一方的に宣言。し

かし熱意が空回りして学生の評判はあまりかんばしくない。)

B 聞き手；新入生2人と留年生1人，それから女子留学生1人。以下に名前とその読み方を記す：

新入生；正岡経子〔マサオカケイコ〕（女）

反町済一〔ソリマチサイイチ〕（男）

留年生；合原史男〔アイハラフミオ〕（男）

留学生；Mary Weber〔メアリ・ウェーバー〕（女）

注意：以下の戯曲のなかには空欄（ ）がところどころにあります。どんな言葉がはいるか，自分でかんがえてみてください。すべて『経済史入門』の各章扉にあげられているKEYWORDSがはいるようになっています（第2講以降も同じ）。

第1幕 佐々先生のあいさつ

佐々：はじめに，簡単なおしゃべりをさせてください。例年このゼミでは教科書を使いませんでしたが，今年はちがいます。じつは私の友人で一橋大学教授の神武庸四郎さんが経済史について本を書きました。『経済史入門 システム論からのアプローチ』という本です。有斐閣という出版社から発売され，本体価格は1900円です。この本は彼が過去10年間に発表した論文を土台として，経済史学の全体像をできるだけわかりやすくまとめたものです。申し訳ありませんが，みなさんはそれを購入してください。折にふれて参照してもらうことになりますから。

正岡：先生，その本はみんなすでに買ってあるようです。

佐々：そうですか，それはよかった。つぎに，このゼミでははじめてのことですが，今年から留学生のメアリ・ウェーバー君が参加することになりました。彼女のおじいさんの伯父さんは有名な社会学者でしたが，お父さんが結婚して米国に移住し，彼女は米国籍だとのこと。ちょっと自己

紹介してもらいましょうか。

メアリ：みなさんこんにちは。私は一橋大学にいる有名な言語学者でドイツでも有名な先生のところで比較言語学を勉強するために日本にやってきました。ところが、その先生はすでに退職してしまったとのこと（本当の話！）。どうしてよいかわからず、たまたま神武先生に相談したところ、「せっかく日本に来たのだから、一年くらい遊びのつもりで日本人と交流したらどうですか」と言われ、佐々先生を紹介されました。とくに経済史学を勉強するためにこのゼミにはいったわけではありません。ギリシャ・ラテンをふくめてヨーロッパの言語のことはだいたい知っていますので、なにかお役にたつことができれば幸いです。もちろん、日本語の会話も読み書きもできます。

佐々：それでは、なにか言葉の問題が出てきたときにはメアリに助けてもらいましょう。さっそくゼミにはいりましょうか。正岡くん、なにか話を切り出してください。

第2幕 「経済史入門」とはなにか？

正岡：これから「経済史入門」ということでみんなで討論をするわけですが、まず、「経済史」というのはどんな学問ですか、先生教えてください。

佐々：（いきなり本題にはいったため、ちょっとこまった顔をして）君たちをおどろかせて悪いのですが、じつは「経済史」なんていう学問はありません。

正岡：えー、それってどういうことですか！（心の中で「この先生、インチキくさそう。ゼミの選択を失敗したみたい？」とつぶやく）

佐々：学者というのは正確にモノをいわないと気が済まない種族でね、略称なんですよ。正しくは経済史学ですね。ちょっと考えてみてください、「歴史」って学問ですか？

反町：ということは、経済史も歴史の一種なんですね。それじゃ歴史ってな

んですか。

佐々：私の独断かもしれませんが、ドイツ人のなかには几帳面で物事を正確にいわないと気がすまない人が多いようです。そこで、彼らの使う言葉、つまりドイツ語で「歴史」はどのように表現されるだろうか、といったことから始めるとわかりよいかもかもしれませんね。メアリ、ちょっと説明してください。

メアリ：私は教員ではありません。先生ズルイです。いつか応分の対価をいただくとして、私の知っている範囲で説明します。まず、ドイツ語には2種類の「歴史」があります。一つは英語やフランス語と同様のヒストリー（die Historie）です。そしていま一つ、ゲシヒテ（die Geschichte）という言葉があります。この後のほうの言葉はもともと出来事とか事件とかを意味していました。つまり時間や場所のさだまった事実ということでした。そして前のほうの言葉はストーリーや物語と同様の意味をもっています。つまり、事実にもとづいた（ノンフィクションの）物語がヒストリーです。

佐々：ありがとう、メアリ。たいへん明快な説明でした。他方、日本語の「歴史」ですが、それはきわめてアイマイに使われています。

合原：そうすると、ぼくが前に読んだ大塚久雄の『近代欧州経済史入門』（講談社学術文庫）という本はヒストリーということになるのですか。
（別ファイル「表現と歴史叙述」参照）

佐々：まさしくその通りです。大塚久雄という人は日本を代表する経済史家のひとりといってよいでしょう。しかし同時に彼は経済史学者（広い意味で経済学者）でもありました。ゲシヒテとしての経済史を理論的に捉えるために経済学的な説明を試みたからです。ゼミでは、この後のほうの意味での経済史学（経済史の理論）に議論の焦点をあわせることにします。つまり「経済史入門」＝「経済史学入門」です。

正岡：そうしますと「経済史入門」という講義で先生は歴史を物語るわけではないのですね。私は先生から昔のいろいろな興味深いお話しをたくさん

聞けると期待していたのに、ちょっと残念です。

佐々：（ちょっとあわてて）そう先走らないでください。もちろん、経済史のなかに登場する具体的エピソードをぬきにして話をするつもりはありません。理論というのは具体的な史実があってはじめて意味をもちますから、理論だけを解説するなどとは考えてないので安心してください。ただ理論のない歴史（経済史）の解説はそもそも歴史を語る意味を否定しまいます。たとえば、こんな記述があります：

「18世紀の80年代から19世紀の中頃まで西ヨーロッパと北アメリカで機械の発明を中心とする工業技術の革命的变化がおり、これにともなって経済的、社会的な大きな変化が生まれた。産業革命といわれるこの現象は、資本主義の先進国イギリスで最も早く、かつ最も典型的に経過した。」（尾鍋輝彦『西洋史概説』中巻より引用）

この解説は、「経済的、社会的な大きな変化」とか「工業技術の革命的变化」とか、あるいは「機械の発明」の意味とかいった事柄の内容が理論的にキチンと説明されないのであれば、それ自体なんの意味ももちません。

「私は今日の朝、歯を磨きました」という事実を語るのと大差ないので。事実の解説は学問的に意味を与えられなければ、ただのお話にすぎません。そこからいろいろ重要な問題が出てきます。まさに意味（もちろん個人的ではなく一般的に受け入れられるような意味、たとえば経済的意味）を与える論理的な手順が（ ）であるといってよいでしょう。それが現実との関連で意味をもつかどうか、これが問題です。もういちど確認しておきますが、経済史学というのは経済史を対象とした研究、もっと簡単にいうと経済史の（ ）であるということです。日本における経済史学の概要については教科書5頁を見てください。

第3幕 学問と歴史

[1] 学問について

佐々：前回保留した問題，つまり，学問とはなにか，そしてゲシヒテとしての歴史とはなにか，といったことについてお話ししましょう。まず，学問とはなんでしょう，メアリ。

メアリ：オランダの歴史家ホイジンガ（ハ）の言っているように，知識をもとめる「遊び」ではないですか。

反町：メアリ，いきなりそんなことを言っちゃこまるな。ぼくたちは大学に遊びにきたわけじゃないよ。とにかく，遊びと学問とははっきり切り離して考えたほうがいいよ（誇らしげに）。

佐々：君の言い方は確かに学問に対する一つの見方をうまく表現しています。つまり，学問は労働するのと同じように苦痛だという見方です。しかし，それはまったくの誤解です。皆さんは身体能力を使ってスポーツという「遊び」をしますね。ことによると，命をかけて「遊び」をします（たとえば，ロッククライミング）。それと同様に人間は知性という能力を使っても「遊び」をしてきました。とくに複数の人間による「遊び」はゲームです。たとえば応用を考えない数学の勉強はまさに一人「遊び」ですし，碁は二人「遊び」です。さっきメアリがふれたヨハン・ホイジンガは，「楽しさ」にもとづく自発的で自由な人間行動を「遊び」と定義し，それは人間を他の動物たちから区別するのみならず，人間文化そのものの本性を形成しているとのべています（『ホモ・ルーデンス』中公文庫）。まさに「遊び」というのは人間が人間らしく生きることなのです。

反町：それじゃ，学問なんてなんの役にも立たないじゃないですか。

佐々：そうかな。それでは逆におたずねしますが「役に立つ」って具体的にどういうことですか。

反町：たとえば，司法試験や公務員試験にパスしやすくなる，とか，英会話がうまくなるとか，パソコン操作が上手になるとか，たくさんあると思います。

佐々：いま君のあげた例はぜんぶ知識の応用（application）ですから，知識

の存在が前提となっています。ところで、「遊び」の範囲を広げるにはこの応用ということがたいへん重要な意味をもってきます。そのためには応用するための知識とその本体となる知識そのもの（たとえば、パソコンを原理的に構成するための二進法などの数学的算法の知識など）が必要です。ところが、知識そのものは依然として「遊び」から成立しているのです。

「遊び」の応用としていろいろな（ ）（技術学）が現れてきます。つまり、「遊び」というものを生きるための理屈に置き換えるという操作を人間は昔から実行してきました。原始人たちが生活のために道具を考え出したのは最初の（ ）のかたちとってよいでしょう。彼らは目的を立てて頭を働かせ、その考えにしたがって「自然」を変形して道具をつくりました。人間はいったん頭を使い始めると、どんどん考えを先に進めていくことができるようになりました。「道具はなぜ生きるために役立つのだろうか?」、「『役立つ』とはどういうことだろうか?」等々、頭をつかう材料がでてきます。これらの疑問は「役立つ」だろうか、という疑問も出てきます。そんなふうに知識を寄せ集めてまとめた理屈、そしてだれでもそこから取り出して使うことのできる理屈、それが学問（蓄えられた学問という意味で学問文化）です。教科書7頁を見てください。それによると、知識（wissen）を集めてだれにも使える共通項または一般項（.....schaft）ができる、ということを示しています。いろいろなものから共通項をとるということは（ ）というむずかしい言葉で表現されますね。だから、その「シャフト」という接尾語は（ ）した結果を示しています。ところで、（ ）にふれたついでに、もっと突っ込んだ話をしてみましましょうか。皆さんの座っている椅子と私の座っている椅子は、もちろん、全部ちがいます。それでは「椅子」という言葉で表現される「共通のもの」は存在するでしょうか。ギリシャの哲学者プラトンはそれを（ ）と名づけました。しかし「（ ）」が存在しようとしまいと、私たちは生きることができます。その意味でこの種の「問

題」は「役に立たない」のですが、それもまた学問の「問題」です。しかし、こうした「役に立たない」ことを考える習慣がないと、「役に立つ」こともわかりませんよね。とりわけ、() について考えるときがそうです。

合原：先生のお話を聞きながら、ちょっとへんだなということが出てきました。いくら知識を集めたって、それだけじゃ学問にならないんじゃないですか？ つまり、知識の集め方がわかっていなくては学問ではないとおもいます。英語やドイツ語などの言語には文法があるし、数学には数学でいるんな式や文字の組み合わせが出てきて、その使い方を知らないとどうにもならないはずですよ。

佐々：たいへんいい質問です。まったくその通りです。語学をやるには文法の知識は不可欠ですし、数学の勉強には集合論が前提となりますね。そうなんです。どんな学問を学ぶ（「遊ぶ」）にもルールが必要なんです。しかし、もっと根本的な問題の立て方をしますと、そのルールは一体どうやって作ったらよいだろうかということが問題になります。昔の人々はそれをいろいろ考えて、文法や数学を作り上げました。

正岡：そんな能力、私たちにあるのかしら。

佐々：確かにあるのです。それは一言でいえば、() ですよ。それに対して日本語には二通りの訳語が当てられています。想像力、そして構想力。ただ、これらの言葉についてはあらためてお話ししたほうがよいでしょう。

反町：しかし同じ能力といっても数学と文法じゃ相当ちがいますよ、ねメアリ。

メアリ：ブルバキ流の発想だったら、同じになる。

反町：なにそれ！！メアリさん、教えて。

[2] イマジネーションについて

佐々：さきほどの話の続きで、まず、イマジネーションのことについて少し

話しておきます。イマジネーションについてはすでにみなさんもいろいろ聞いたり読んだりしているでしょう。たとえば、ノーベル賞作家の大江健三郎は『核時代の想像力』といった本をつうじて「想像力」の大切さを論じています。私たちはみずからが原爆の被害を受けていなくても、原爆被害者の立場にたって彼らの窮状をいろいろ理解し、ともにその被害を「共有」できます。それが「想像力」ですが、そのばあい、原爆について基本的な知識をもっていなくてはなりません。人体が放射能に汚染されるとどうなるか、なぜ原子爆弾ような兵器をアメリカ人は日本の民間人に向けて使用したのか、そんな残虐な兵器をつかう戦争とはなんだろうか、等々の知識をつうじて私たちは原爆被害者の「痛み」に少しでも近づき、同じ人間として彼らと共に生きていくわけです。そうした理解、共感の能力を働かせること、それが「想像力」の中身です。

今一つの例として、三木清という哲学者はイマジネーションを「構想力」という表現で論じています。彼は人間に固有のその能力を「技術的理性」ともよんでいます。つまり、人間は或る目的を設定し、その目的に達するためいろいろの知識をまとめる能力をもっているというわけです。その意味で三木はイマジネーションを（ ）と結びつけて論じました。彼はつぎのように述べています：

「技術は主観的なものと客観的なものとの総合であり、しかもそれは形における総合であるというところから、技術は単なる理性にではなくむしろ構想力に属すると考えられねばならぬ。」（「技術哲学」より）

合原：同じイマジネーションでも大江と三木とではずいぶんちがう感じがしますが、そのあたりぼくたちはどう考えたらいいのでしょうか。

佐々：ちがいよりも共通項のほうがたいせつです。イマジネーションというのは、要するに、どんな対象であれ、その対象を人間が自分の頭のなかに思い描くことのできる能力なのです。そこにできあがるものがイメージ（image）です。みなさんは意識していなくても、いろいろな思考の対象につ

いて、自分のさまざまな能力を結集してイメージをつくっているのです。イマジネーションの働きを理解してもらうために、数学でよくつかわれる関数をつかって考えてみましょう。それはこう書くことができます：

$$f : x \rightarrow y, \quad x \in M, \quad y \in N \quad (\text{教科書10頁})$$

正岡：いやだ、なにそれ。私の習った関数は $y = f(x)$ というふうになっていたわ。

佐々：同じことです。これはイマジネーションの働く仕組みを知るためにわざと用いた表記法なのです。言葉でいいますと、思考の対象の集合Mの要素 x に或るルール f を適用して、そのルールに適する要素 y の集合Nができあがる、ということです。

反町：これがイマジネーションの仕組みですか、へんなの。

佐々：ぼくも気が短いけど、君も相当なもんだね。もうすこし説明を聞いてください。上の式をイマジネーションの働きに置き換えてみましょう。まず、Mは思考の対象です。その対象にイマジネーションを働かせるというのが f の意味です。その結果できあがるイメージが y であって、その集まりがNという全体をつくっているというわけです。

反町：だけど、こんなふうに記号に置き換えて、イマジネーションの働きを捉えることになにか積極的な意味があるのでしょうか。

佐々：みなさんはもっとイマジネーションを、とりわけ連想 (association) を働かせてください。というわけはこうです。つまり、人間がイマジネーションを働かせることと機械が作動することとのあいだにきわめて類似した関係があるのです。それは

対象　イマジネーション　イメ - ジ

という関係に現れています。教科書11頁ではそれが関数関係に置き換えられています。対象をインプット、イメージをアウトプットと表現すれば、この関係はまさに機械による生産活動と同じです。その意味でイマジネーションは人間にとってもっとも重要な機械装置なのです。しかも、このば

あいのイマジネーションの働きは前にふれた応用 (application) であって , associationもまたそれとの関連できわめて重要な意味をもちます。メアリ , ちょっと説明してよ。

メアリ : 人使いの荒い先生ですね。

正岡 : メアリ , ありがとう。あなた , 日本の大学の先生になれるわね。

[3] 歴史について

佐々 : さて , つぎに歴史についてもう一度考えましょう。前に , () としての歴史には「時間と場所の定まった事実」という意味があるという説明をメアリがしてくれました。もっと厳密にいいますと , 歴史というのは「時空座標の定まった事件およびそれらの事件の順序集合」であるといってもよいでしょう。

正岡 : 先生 , 悪い癖ですよ , なんでそんな () 的なところからはじめるのですか。いきなりそんな定義をもってこられても , なんのことだかさっぱり分からないわ。

佐々 : すいません , 本当にいつもの癖なのです。もっとくだいたところからはじめましょう。たとえば , フランス革命という事件がありますね。それは1789年にフランスで発生しました。また , 1914年にサラエボというところでオーストリア皇太子が殺されましたが , それが引き金となって第一次世界大戦がはじまりました。ところで , これらの事件はいずれも場所と時間が定まっていますから , 「時空座標の定まった事件」です。また , それらの事件は何年間も続きましたから , 小さな事件が時間の順番で積み重なって一つのプロセスを経過しました。それを「時間の順序集合」といったのです。

メアリ : 先生 , 「順序集合」というのはorder setのことでしょう。しかし , 日本語ではorderが二つの漢語に訳されていてたいへん困ります。どんなちがいがいいのかしら。

佐々 :説明..... (別ファイル「歴史における時間」参照)

反町：それにしても，歴史を定義するのになぜそんな（ ）的な言い方をしなくてはならないんですか。

佐々：そのわけは，歴史というものをどんな学問のなかでも共通する尺度として考えてみようとしているからです。もっといいますと，ほとんどすべての学問の研究対象はこのような意味での歴史ですから，どこにも共通する表現を与えておかないと具合が悪いのです。たとえば，物理学で歴史というばあいと経済学で歴史というばあいとで意味がちがっていたりしては議論が無駄になり混乱が起こるばかりで，「歴史なんて考えなくてもいい」といった結論になると困るのです。

合原：それは良く分かります。しかし，（ ）的な概念として歴史を考えなくても，たとえば経済学で歴史を考えるときにはどういうふうにイメージすればよいのかということは，もっとやさしく説明できるのではないですか。先生も研究者であると同時に教育者でもあるわけですから，そのへんのところをもう少し考えていただかないと……。生意気なことを申し上げますすみません。

佐々：いいのです，君のいうとおりです。しかし，（ ）的な概念操作ということにもなれてもらわないと，先々ぐあいの悪いこともあります。

（佐々先生，すこし困惑した表情をうかべて）それでは，マージャンのパイの名称という具体例を使って（ ）的に説明しましょう。つまり，東南西北白発中（トンナンシャーペーハクハツチュン）によって「歴史」の（ ）的な説明を試みましょう。教科書13頁の図を見てください。歴史は，まず地球上の事件ですから，南北と東西という座標軸で場所が特定されます。東経と西経が横座標を定め，北緯と南緯が縦座標を定めます。これで空間の位置は決まるでしょう。つぎは時間軸です。これは一つの軸を形成しますから，それをt軸としましょう。t軸上の から歴史がはじまる（有史を意味する「発」）としますと，有史以前は空白（「白」）です。より上のt軸上の任意の点は或る事件の発生した時点を示します。そし

て事件はどれも一瞬に終わることなく途中経過（「中」）をもっています。

こう考えますと歴史のイメージがはっきりしてくるでしょう。

合原：先生，そうすると「時空座標」というのは3次元なんですか。

正岡：え，時間が入るから4次元でしょ。

佐々：少し説明を加えます。（別ファイル「歴史概念のイメージ」参照）

佐々：最後に，歴史でない「事件」のあることにも簡単に触れておきましょう。これは当面の主題に直接関係してはきませんが，知っておいて無駄にはなりません。それは物理学に関係してくることです。物質のミクロの世界では素粒子という「存在」が考えられますが，その歴史を捉えることはできません。それらの粒子の「存在」する位置と時間とを同時に正確に決めることはできないからです（いわゆる「不確定性原理」）。また，ものすごい高速で運動する「存在」を考えたときには時間と空間とが分離できなくなります。たとえば，1秒 = 36万 km といった「等式」が成立する世界では「時間を内蔵した空間」を考えなくてはならないのです。もちろん，こんな非歴史的対象は当面問題にはなりませんから，あまり気にしなくてもけっこうです。